蓼風茶露

特別
イ4
1919
739

特
イ 4
1919
~~121~~
739

あらしふけの月冷まさる庭のおもて

おりしく落ち木の葉をぶりて　清月

うゝしくとのとけきすまの心より

におい出ぬる山さくら哉　真淵

武士の矢にはぎあをを驚の羽は

うんりもてさくなりけくをみける　有仲

くんまいに董くへる野の原は

八重垣雲に霧やたちあけむ　有印

利のやつこ住のやつこ多き世に

わんはわゝ身のあるにうけり　一ツ

人に世に平らかるゝぬわが胸も

しばしらくさを山人の音

庭の面はまだ乾かぬ夕立の

やはらげるゝ涼しき月こそ　秋江

岩も木も焦きし秋の雲清て

ちらしき出と掛ふ山風　秋の月の頼相の忘れん

此あれに夜ゝ月はかゝらへも

心のけ雲霧もうとうゝ　澤を辺の風流

世の中は鏡にうつる影にすんや

有ふるもあるゝ無きにもあるゝ　宣翁

心からまこしまん降る雨はちゝに

風こそ秋の空をうつるあ　日甚

生れ出て乳房しるものや雅子の世の物思ふ初めそるん　有印

入れの鏡とはかれもきすて

身の夕雲を知る人をうき　芭蕉翁　公長文龍

捨つとうしは憂世をいとふしるしめるむ

わんこは星ん秋の夜の月　一ツ

いつこれも住まんすばらに住まむあらむ

葉のいろのしばしうつるまで　一雪

大波に引かれん出でる心地して

即ち舟うきぬ沖にやうらく　一雪

怒めうる岩のはざまに狩りみて

人目おもはで袖おもはばや　一雪

惜めも鏡の音さくかけるかな

一雪　一雪のむすびかふらん　一雪

黄昏し相のふ松に年ふる

あくしの音を樹に聞く　一雪

数ふるに身にさく年のつもりかな

光は人をもきらはさりけり　成寺法師

照らすも思ひ果てぬまの花の

脚月雨をめでれかりける　大江千里

雲の色は雪にこそ見えそめ

春をだに待ちあまる山風　道照

今朝見れば雪のすがたん折れん枕も

起きも寝ふるあかぬ春の

夜すがらひくきぬぬれを

ひえまんうつと思ひけるふ　一雪

ぬばたまの妹が黒髪今宵かも
われ無き床に触れて寝らむ　芳素

朝寝髪わが乱れ掻くし愛しき
君が手枕触れてしものを

ぬばたまの黒髪敷きぞ寝る夜を
手枕の上に妹待つらむか

こころして見ればくことをあれ秋の風
芝生しまもる花のいろ〳〵　紹鷗

きしなべて寂しき空と思ひしに
春咲きぬれば散るさきの雲　光国

あしひきの山下ぶれ影ぶれば
屑しらくに我れ恋いにけり　能因

いはばしる垂水の上のさわらびの萌え出る
春になりけるかも　志貴皇子

白雲に羽うちのばし鶴山の
かずさくれゆく秋の夜の月　芳素

宇治川を船わたせをと喚ばへども
少えさるくに掉の音もせず

ちかい思ふ草の庵のよるの雨に
流る涙くを山ちくきん　俊成

けがさじと思ふこの身をとゝまんば
世渡る橋とゝろぐ悲しき　益鉄

日の本のなかなる人は天が下
こと国かけて不二の大山　蓑田

天つ日の照る四方の国中に
なくしらるゝ山は富士山　伴蕃渓

さく花に鶯おとゝんは鳥なれも
はむことゝは思はさるらん　大淵言道

我れにも狭しと思ふ楽の尾に
ゆうぐさし入る岩鈴の音　梅宣田内

あかつき地大道はやそ岩根のみ
さうしき山にまゝふ世の人　蓑田

ことの葉は人の心の形なんば
おもひをのぶるおとゝなりけり　〃

思はじとおもふをおもふものこそ
心の外の心なりけん　久蔭

咲ばちる浮世は鉄の末秋の
花と月とを人の世の中　成重

世の中の定めなきこゝろなるゝん
去夏きもまた変りもやせん　有切

梅の枝にこぶめる雪やそけめくむ

ほしあくの霞の花にこぶめる　金槐集

わが袖に香を分て残せ梅の花

あかで散るわすれぬ人に　〃

夢はいとくるあじを梅の花

ことしの春散るとしらるる梅ばし　〃

年あれば春の来ぬれば梅の花

けるを先しの香に匂へる　〃

わが宿の梅の花さけり

さ夜更はいとくるを散るまでもとし　〃

河霧のかちこちの人ば言葉冊

あけぬくさをの古の人をまつ　行家朝臣

人毎に一つの庭はちるとも

我のは許と英雄の花　道鎮

世をすて山にいる人山ゐても

その日暮きときはいつち行ゐる　鳥羽

梅の花いろはそんもるるぬまで

風をみなんと雪ハ降ゐる　金槐集

梅の花咲ける国々に家居んば

ともしくもあらず雪の降　柿本人麿

雲ゐ一ゑ心ハ[illegible]ゞか殘りけむ

憂てはてゝきと思ふ我身は　同

吉野山こゝの葉の道かくて

まゝにてあ方の花を尋ねん　〃

古寺のくち木の梅もけさをあん

そぶて花もほこ[illegible]ぬ　金槐集

[illegible]人の道さへ絶てゝ

雪ゝ深き隱んの住ゝ　大隱

さのまゝ花咲こもりして玉待む

後世に埋む山かけ[illegible]　〃

積りて秋の掛のゞ庭の面の

もみぢは秋のかゞみ[illegible]ゞ

引いとゞいかゝしいとゞあの泡の

浮世ゝ[illegible]ゞ[illegible]流の川あ[illegible]

消の間を花ゝやいはゝ誰も結

吉は結ぶの前の朝露　無言

心ゝて踏ゝ[illegible]ゝ[illegible]

積るが上ゝ[illegible]ゞ　〃

松虫の聲ゝ[illegible]ゞ[illegible]

ひとゝ[illegible]花の露[illegible]　[illegible]

人とはぬ苔の庵の夜の雨に
とはるかぜの出の音ぞすむ 〃

さを梅の枝も影のえにしとや
舟のあととふ月の白波 〃

あまく遠山里き夕ぐれに
入江のたづの色ぞまがはぬ 〃

山ぶかき心の住家かはらねば
世を遁れこしかひもなきかな 北戸庵

雪をおこし波をたてはは見まくも
元ら風の姿やはもある 〃

けがの雪あくがれあけぬ霧をしも
玉にぬきそぞ月ハすみける 〃

ふし絲のかなたこなたにまとはれて
思ひとかねぬ世の中のうさ 〃

世を毎に浮世の人かなげめこし
猶よ誰を思ひ出つらむ 成章

思ひ君いづくんぞ世の中は
まことと猶ぞたのみそめける 景樹

さしもあく人の日今の数ふくて
都大路に夏は来にけり 言道

恋ゝ来る我迷ふを必き知て

出る犬のよ何無くまし〻

〃

たゞくとおつる岩間の芝清水

くみもすそぬるきまさるふ　雪月

かくばかり屋かゝ〻見ゆる世の中に

うらやまゝくすめる月うる　作成成

何ゝもあゝぞうらゝ世の中に

〃

かいらぬ、あは秋の夜の月

何ゝかはゝゝゝゝ世の中と

〃

志ゝもと言の白くゆるらも

たゞ衣ぬぐやはまの伝夜うの

神ん々なを祭も法のぞ　宗家

春風もゝゝゝ花はなもやめの

見はひんこもるゝはひゝうけり　本で辛文

まとハうは城の色はおらぶ〻うゝ

松ゝうゝゝこそ恋ーゝうゝれ〃

数ゝの名きこ人志のぶもゝくは

わゝう身のゝるぞ切やしゝうけるゞ

古の七のさゝゝき人々ちも折りもしゝ

酒にーあゝゝ　大伴旅人

言いあまぐ為もまぐだらん極りそ

光きこえ酒にしあくく

あらみれくく賢しらをまを酒のまあ人を

よく見ば猿にかも似む

生るあはつひんはるぬるこえんあんば

この世こそ間は楽しくをあくぶ

この世にし楽しくあらば来む世こそは

出るもうるえんさこそよむ

天のあん雲の浪立つ月の船

星の来に漕ぎかくる見よ 柿本人麿

大海の磯もとどろに寄せ来る波

割れて砕けて裂けても散るかも 実朝

わびぬれとわが庵もうんば住こそ

心やすきを思いでしも

手折りこし花の色香はうすくとも

あらんみれまくくばかりは 良寛 詠歌

風はきよう月はさやけしいさとも

おどろ心まさむ花のまどりん 良寛

いざうれくわん立ちまはんぬばむの

今宵の月にい行飛べーや

つゆしらぬ玉ぬく秋の出でしかば

わがふるさとは武蔵野の原

わが待ちし秋はきぬくしをちこちの

くさむらごとに虫の声する

夕秋いまぬくし我宿の萩のまがきに

露の玉〳〵

山かげの萩の庵はいと寒し

紫を焚きつる庵を思ひやる

うつろふ色もやゝしるくそまるらん

きりの山べに雪や降るらん

わが庵は四辺山もとゞこゝり

あきこの人のあとさへぞなき

はきだめの蓬の下ろる芋すらも

子は親にこをつきてあるけん　言道

山松のもとさくゆるし花もう

こうやすげるかげの冬ゆ

やはだのあつき血汐に解るもで

濃しかしすわ花を説く人　月照子

平らけき花をうしろく世の中を

ゆき改めん天地のわざ　西郷隆盛

ものうくれ行き人ぞ夏長の

ながめ入る夏長き日ぞ世をうけつ〻

住みをもる因屋の枕うちつけん

叫ぶはかりの法の春雨

ものうくれ乱れ御世の急れて

雨長の霞れぬく袖こそ

かなしとも君れぬと祈りつる

老か命を神はうけまや

恋とのみ待つる人に山里の

雪間の草の春をそしらはや

三条公之詠

家隆卿

ありとある世に風もつ谷の奥

あの雪をそなたのくる

河隈の葦根ばる世と竹

ふびきぞ面うあを狭めて

淵めくる流るあをそくと

廣きあるくとをつく世うる

潺くれん雲もつ苔路風ありて

大陰くくき世の奥うる

吾か袖をうるびる流こはるるもも

鬼つるる春雨の宮

曙覧

燈火のもとん夜ふ〜来る鬼

我かいめるの張りきかるゝ

人無き人にぞかする歌ふ

鬼の夜更けを来はせるゝ

凡人の身をいらじ天地の

心をめん淵ふ〜わがうん

床にゆくこほろき橋を撲んて

砕けんを寝ごこちのうさ

破くもあ〜ふ辛くもあるめ

味ひを一かをもて豆のけれる

淡しかる味にかどう豆の汁

ゆきいやーき品にまぢはる

風の梅仲んあきて散るぞ入る

葉うつ石牛ゆる宮

吹きおろす風の松賀にうけ

手ふう顔のゆる砕人

勝入るーばかりもあるる雨を

味にとんて身をまぬめあり

庚回の伸ふまる迄に入さる

苦の志改の寺ぞ屋ふき

虎のまをうし地獄入りとも

思ひかけどといひし人奇　墨村

行く末は六ツも一つの乱花咲ん

あの屋敷出つる月影　播州玉城

片山入日の影さしそそる

しくるるき冬の夕雲　〃

主しらぬ岡べの星を来て問へば

答へぬ先きに犬をとがちる

鏡ゆはうらめ人のまこころも

さいなん見ゆる天蓋のあと

一くるひ出きる筆のあとにくく

見ゆるは人のこころなりけり　昭憲皇太后

身を捨て世を救ふ人をますますを

草のいほりにいまもとむとは良寛

七人の踏み伝ひし古道は

荒れんけるかも行くと人なし　〃

ちりくに人里近くそそんけり

あはれん山の奥を伐り行く　柳生十兵衛

御製集

あらし吹く世も動くなく人ごころ
いはほに根ざす松のごとくに

小山田の稗の穂を通細ゆれど
かりあへてぞし一つは通へる

國のかぜ一人を思ふかな
くれゆく秋の空をながめて

菊の花机のうへにもちゆれば
まがふにぬぶいとさうければ

雲のあなたはるかに人の家さん

思ひやらるゝ鏡の音かな

雲のをさもちき朝あり

国もゝ分中とる手もさぐとゞめくも

朝雲のあかさしくを山かげの

庭のこまゆ毎ちきをも

天つ神定め給ひし国なれば

わが国をとゝまるとかうける

いと筋をあなを思ふは千早ぶる

神代の道もとゝかうめかな

おのづから仇のこゝろ晴くもり

誠の道をあやくれをみ

はる鳥のうへもおのはひよろぶ民

くれ心をつくる事かな

寄せもふつゞき雨はらくらし

こまるん 瑕ともとあるをば

はるゝと風をまもるくみ井の

枝もうとかぬ夏の夜のこゝろ

月清き庭のまゝごとあもと人の

かれも寄くうつる夜はくるる

ともしびも吹きけすはかり風たちて
はしゐ涼しき夜の庭かな

端居せぬよはこそなけれ大空に
天の河原のみえそめしより

末つひにならさらめやは國のため
民のためにとわかおもふこと

くれの端身をかくすらぬますらをも
あまさこえけらむ時はしも

あた波をうちしりそけしいさを人
南の島の月や見るらむ

乗る船のあふみまてこそめくれけれ
ちさ霞みかき鳴鵜のかや原

千萬の民の力をあつめなは
いかなる業も成るを思ふ

高殿に身はおけるとも
あま小舟うかふ波間に心こそ

國を思ふ道にふたつはなかりけり
いくさの場に立つもたゝぬも

すしあらはなほみなる入りぬとも
思ひかやかてやまとなるまし

千年は過いくさのにはん出でぼたん

おきなやひとり山田守うらも

八方の空はへだてもなかりけり

土うる四ちさかひあんを

まちうとのぶに仏ちいさこうも

まふるあしうきぶ宗のくん仏

千年まむおいせさうべき基の仏も

生ひかつはと仏時のまんも

吳年のおきふしごとにあわふ

人の心のなかくも世を

宮の戸とちけくん見えど

あるのあ仏ふかう仏の姿さうけり

時うきさく人ちうと山すも

かくうて都うと塔まさうけり

あしひきの山ひうる おれ都うと

ふるうあ 心かたくもあうかふ

北かやまく宝にとうちいかづちの

都うんきはひて多王もかく

雲はかう出んまうひて多王の

あう出でのまうの墨うもあうかふ

旅人と野辺にのこりて名をは
高嶺はるかにこえとけるこゝろ
起き出て思ふ事ちとあれとも
おさゝる心にひとりのりけん
すゝげき世にかゝめる人の話
まゝびの庭に勧めを思ふ
用にてこゝに祈れもあひとはぎさるは
人の心のまことをとゝろみ
かざらもと思ひさりては まゝくれん
うるはしからむ人の心は

次上の流れてる日のかゞやきて
みさくあつく見るこゝろ
ひとつつく市の家屋は暑かるも
風の吹入る家をばくしと
ときのまん祝のかはくれなゐ
けふのあつさのしらんけるかな
童子ひく車のおとぞきこゆる
てる日の暑さやくがしき日
あかしいま思ひあつめつくと
ふけわく月をなのめつゝ

子を思ふきいすの歌をあはれとも

狩をとのしる人もきくらむ

かんくれなゐのもみぢ庭の面の狩人

なくなる鹿くるのさびしかりけり

思ふことあるものがまくれ言いづる

おさまる心やまことなるらむ

同じこと問へかへりてさるの子が

あそぶうちにやものをぶらむ

いつくしみあまりおかるとばもろこしの

空ふる雨も なろかざらめや

とる梅のこころ長くもこきよせむ

芦間の小舟きくらもあるとも

山深くかかくるこ人とあかへても

世を治ちへたり 道を問はじや

身はなるはかまるるも

剣大刀ときよ忘れを大和心を

年をれおもひやんなる山あをを

海ふもも 地ふ裏なあるけり

わかどのく下ゆくあの音きくも

さらに一首 花とうるにけるかな

遠くまで海をゆこうとて

わうあうんかけうとやく吹の山桜

國民のおくりもふくて行くとこち

さむーさ　ていらあ　都の長えち

心振する石の軒端のあさければ

枕の上に月のさし来る

いさーくもわが飼ふ馬の老いやらぶ

もしきは人にかはらざりけり

つる人の心をはめーーる駒は

ものふらもあるんうんけり

にぎはへる都大路をもる人は、

ところのやすき時やちうちう

かかはるくもに戦ちうちうは夏衣を

かるーーづのめがうまごろうちう

ものをもにまぶいはぬ手も芳代と

よばへばやかて手をあげんけり

いけけうくはふこどもちさきちうちうれば

わんちさちうちうちうこちーて

年高き老木の杉はいにーへの

ちとーふ左のーーちうちうけり

あるあけの月のしづくを蓮葉の露

残て庭は明けはてにけり

ふきおろす嶺のあらしに山里は

さつまの雪をけふもちりくる

ちることの久しくて後こそ世に長き

よはひをもあつかひやあらしを

山々の色は新たに見わたしも

わがまうすことはなるにかあらん

酒十駄百合持つて行くや夏木立　蕪村

ほとゝぎす大仏殿を洩る月夜　〃

あの鶏叩き鍛冶と夜明かす　〃

古稀や三百年の風薫る　〃

三尺の庭に上総の蕎麦かな　〃

元日や我が日本に生れたる　州交

元朝や新はたりたる富士の山　〃

仰向いて冷らさんとおもふ雪　〃

殘らじと空支へる垣の冬もめ　〃

蟬ひらひら天竺の寺をはなれけり　仏哈

白うさぎやたらたらたらと江戸のみち　〃

夕立や金鼓山河を動かして　〃

踏まれぬ草鞋脱めばや夏の露　〃

石踏んと石踏んと草踏んと夏草哉　〃

稲妻や二尺ばかりやこを抜いれば　蕪村

秋の雨庭に灯して眺めけり　〃

炭取の底負しくも杉菜うる　〃

初めやは髪剃り捨の男ぶり　〃

質屋も結ぶ柔花うる　〃

鞦韆遠の秋の夜長のすきひうる　〃

蜆売や博徒の跡維計未だ成らず　〃

死ぬ秋雲のいめ剛を面白き　〃

深山木や谷に遊ぶ秋の雲　〃

月涼し格架けばやと歌ひて　〃

いざい風の鎖きらきらこの峰　〃道遥宮殿下を悼む

惜しけんを無沼りやわれ庭の梓　〃小浅宮殿下逝去

新仏や愁を知らぬ格きぬに　〃

炭竈に手負の猪の倒れけり　蕪村

鶏責市に力をそそぐけり　〃

秋すめと合點さとる蟬ごゑ　蕪村

寒潮みな北斗に響く砧哉　芭蕉

花ゑのぶ牡丹(弱)なくらひを友すくめ　〃

くやしくも熟柿仲間の坐つきぬ　一茶

我家は煤竹色の冰柱ごゑ　〃

狐火や翻雲に雨の化まる夜　蕪村

閻王の口や牡丹を吐んとす　〃

古井戸や蛙に死の音信し　〃

釣り上げし鐘の巨公吞や吐く　〃

鐘消えて花の香は撞く夕べかな　芭蕉

閑けさや岩にしみ入る蝉の声　〃孤雲

木枯に岩吹とがる杉間かな　蕪村

木のもとに汁も鱠も桜かな　〃

五月雨をあつめて早し最上川　〃

雲の峯いくつ崩れて月の山　〃

庭掃て雪を忘るる箒かな　〃孤雲

おかしく老きらんおもふ蓮毋の恩　蕪村

たんぽぽ蒲咲り三々五々土手は黄に三々は白し、記得す去年此路

踏よりすがら　蕪村

秋風や酒旗翻る河内路　〃

漁者樵者　蕪村

おぼろ月時うぐいすさそふまの蛙かな　其角

雁の月あるじを問へば芋掘りん　〃

青雨や人住みを恨む堀を渡る　〃

つかの間も行れうこくうき世道とも花のさかりに　一茶

古さしのみ涼おもくて主かな　〃

一つ戸よ敵ぞすまも事うらば　〃

人の為しらぬ山に雲の法はけ雨の雫をくらん　〃

けあはけの空はあす迄ぬく蚤の細きけふのなかもしきに　〃

世話あ爰れあるとて迷連を松にさけ雪の宮の深しき　〃

型もあり　あさつもあらと霧の世の霞を貪も思はさりけり　〃

目出度さは小くの迄うと多り吉の栗の志ら後稲のまく回　〃

大義の陽のふすまに笠の外てかくんと身をかはの乳　〃

飾るは後ちは又も面白うあ　子龍

木がくれを名誉の家の幟かな　其村

松風と笑はは落毋の幟うあ　長義

菊つくり面は為ま奴うう　其村

うんしきは美かくん松の一の乳　杜国

山川を出れば日本ど茶摘唄　宗波美濃山

埋み火や型には家の乳活の　菊舎

皆の為を大針に絶ふ誉うあ　其竜

登助

すいとけくあ海清し光の琴　牧童

はつ戸や山へ舵れは空に迷ふ　千代

初戸やそらんじて文い搭いこと　〃

雲かと鳥もやぶも物どうの。　〃

的月や何の爪まぢのばす富士の嶺　〃

おろしい雲のうしろふいもうぶ　〃

松の葉もよみつくすかと涼けり　〃

涼風や押れ合ふる老と文伝　〃

初雪は初霜に乗えたけり　〃

志ぬ八梅ぐらめ浮世や廿の雪　〃

寒の中土の笑いま空に飛り　〃

都鳥やおのが山夢かと蔦に咲く　〃

寒ゝゝは踏うしをい出朝の雪　〃

梅咲や何不沙ゝゝ　〃

梅うゝや高ぬるるどの枝にさく　〃

出ぬうゝ牡にこぶうゝ音もうゝ　傳立

わが影の聖にーち迄れきりくす　英太

梅のけも梅よとや梅のとりくす　文仲

つんのあゝ所く掃ぎきりくす　〃

白髪ぬく松の下のきりくす　英太

十八ゝ丹ある夜や蛍のこゑ　蕪太
無文と立つや空人の怪しまむ　文艸
庵に来て新に入るやきりぎす　芭蕉
塩ふるけ我ゝこゑは秋の風　〃
乙鳥のうしろや寂し秋の風　〃
義仲の寝覚の山や月冴て　越山
月いづこ鐘は沈みて海の底　〃
あんこれをあつめて寒は脚ゝ　〃
鶏頭や丁の来ることきらは　芭蕉
石ことにへびはいくや雲の門　素牛

鐘の音の輪をなして来る夜長哉　子規
蕎麦あんと並はあんと雪見哉　〃
口惜しや春の筍ゆ蕨　〃
さいと思ひ出す人皆来し　〃
旅人の名をつけて行く涼しさ　麦丸舎
はつ月みな前の景や秋の風　芭蕉
風流の始は奥の田植歌　〃
栗山ゝ顔と現はれてうつげり　雨考
あらはふと青葉若葉の日の光　芭蕉
星の名をとゝ問ふ人や門涼み　子規

水江の釣舟帰る時雨うち
ふるんで芋ぬ足ふく夏の夕
涼うくも男に生れかな

戸を明けて蚊帳に坐の主人哉

蕪村

夫角

蕪村

星はかゝる時浮雲うゝ霧雨うゝ
雛市の母は泣くあれ勝んけり
蛙らは出んと蓮やれ蓮やなのれる
彩うや名も無き塚を草に埋る
夜ぎまの道遠柳に暮さゝる
夏の雲入るや何と夜叉と以て
若葉やみ打ていの木の仏けり
夜は春の曲者ん炉うるる哉

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

蛙蛉の曲入れこもり目玉ゝ
山開駅長宅の美人ゝ
思へとや風鈴ゆるる止む夜に
西行を残して京士の雲ゆけり
ゆかんとす琴の歌仏ゆ
塚ゝを縁とし引摺る布団哉
月に飲む長堤十里人稀ん
四畳半の野を笑ふて柳ゝ
四つに但んびあまり顔の蛙ゝ
男角毋をやくしと仲四ー柳ゝ

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

冬木立淋花たりとあるべきなり

惠に度と詠る度せ夏を度せ度せるなり

初汐や腹を言ある遠磨船

〃 秋いと山夢に浜ときんなり

秀才の扇を柳ぬ午睡哉

磨が洲や碧湛えて蒸暑

人なるべし蛍んせるものとも弁

浸さと江は濃を柳哉

狼や牧流くしき山の月

鶺鴒に軽き妙や紙礫

小波

楊貴妃小海老の花を咲かせけり

寒月や柳の大柳の最もなく

洗い上げて子芋の美量競へけり

睡蓮の夢や松りを行く

風に絶き雨に絶えて夏空哉

忘れ草や失出藤も紙色の花

日の面や八千歳の蓮も芒蓋する

鈴なんん九代の梅や蓍寿の花

夏山の日毎に雲を変へけり

雨の雲や本の雲や緑の夕涼し

人の父を悔む

叩かんと畫の蚊を吐く木魚かな　蕉

立つ秋の大鐘つくや慶法師　〃

山門の仁王に迫る若葉かな　酔雪

たくくと松のふさまの夏　〃

出合ふ人各と旅の感　〃

紙鳶やまた初人の友は誰ぞ　〃

風に乗つて駆くの一行く蕉かな　〃

作られと菊咲にけり初しけり　〃

唐丸やこ一枝岩や秋のあ　〃

きいーさん畫は鉢ろ光林寺　漱石

〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃

童子ゐどるおさき人に先ず

桜の赤山まるで侯爵どの

月を行く漱石あをんかな

朝寒や夜寒やひとり行く旅び

山天垂上にある野の長閑かな

寒山が拾浮か蛙に教へしは

無人島の天子とまるは涼しかろ

いれつくんの菊さきつくん故郷は

蔵ささきつん蕊を伐せる橋かな

山迫へ行かくかとなつかしくいへーか入りぬ河原の川かみ　花紙
もの淋く峙つ岩とまんまに浪押しかけて舟さかの日る　〃
花くも岩とりまんとうわか舟は碎けてまとまる刹那　〃
あきあも舟もせいもかくれかみんん砕へつかめしの沈もの　〃
照る月も帰く生の寄もやくれも皆もれ似て流る秋の海　〃
柳ちる秋の西城寺拡さひーき吹くと意のみるも　〃
芙蓉くんのかんの花も過ぎあると思ひ及ーと世を交る我　〃
飽き足らず命惜へ〜日さきき大事れ幸）ぬで花きの日のかく　〃

五戒おちー素行乱ひくと清山の木々みをあくる蕎きの夢　〃
雪の国に乗り急きを為ちうけり　漱石
嘉い人にとうとおるとタ涼み　〃
二文投げて寺の縁かる涼み　〃
をーー馬よ一と花別れを惜をーれ　大江丸
廃る身とさ暮れ城ちう秋の風　岳雪
あけがたく行燈に掛を書くく夜長　〃
元日や一系の天子富士の山　吟雪
ぬ年のと時めく柿の枝うる　英太

御所柿に移すまん点の紫山子こゝ　蕪村

崖に一ツ秋のとゝまる蘇柿こゝ　蕪太

破れ鏡のいゝさも日若し夏の月　樗枝

日盛や陣あに煮きる陰の赤ろ　涼花

乳垂れて水汲む女の暑さ　尚白

松蔭に旅人昔ゝ日暮さこゝ　太祇

端居して妻子を思ふ日暮さこゝ　蕪村

暑き日やけつゝ行く戸の昼所　鶏雖

あゝ冷し鉦の音なる一心院　寒雲

日盛りや八百八町焔立つ　子規

鶏の初れまゝ迄も日暮さこゝ　凡国

待ハ時さく切るん炬燵ゆるゝ　支考

首くゝる縄きんもなし年の暮　蕪村

心なき身にも殺るる蛍山哉　寂墨

こゝろ向けてゆゝ森しき秋のくれ　芭蕉

秋来ぬと目にまや豆のあとゝ刻　大江丸

馬庚つくん白き髪元ゆけさる秋　几董

朝貌や秋は朝のくあらんこゝ　蕪太

いやくゝと壁をふまくゝ重陽哉　芭蕉

石の香や夏草赤く露暑し　芭蕉 稚生石

あとく花心さそはぬあはつゆ　見道

町あるく庵の背高かし　朧月　雪夫

よ巻あんといはんや猫こうる　太祇

梶ちらくて世にかしはしるあり　茅舎

二日酔ものは花のあるあいだ　梅山

紙で死ぬけしきはてんぷの春　〃

春ちれみなきしまあとや塚のから　〃

白道は石ばさばら消ぬべし　〃

雲を着て風を蒲団の捲るかな　〃

あく暮し油しめの木の叶吉　蝶郎

蕪菁の香やまぶみぬ海のなつかしき　蕪園

一夜二夜蚊屋のつくしきにほひ哉　江戸春氏

戸を叩く狸と秋を惜みけり　其日庵

草枯れて狐の見御ものちけり　〃

枝柿度と云ふ忘いて妹が眠寒し　字雪

熟の子の白魚まじる別れうる　茅舎

ちらぶ立て見新行く鶏や夜の秋　太祇

雲ちかく鶏の寒さとる夜ぶこうる　岡更

時鳥酒九四の五の言いさめを　井月

初物食酒九四の五の言いさめを　〃

さびしさのうれしくもあり秋の暮　蕪村

柳散り清水流れて河骨の　〃

起きて見てもう寝たと思ふ夜寒かな　〃

日は暮れて夜は明けやすし蛙　〃

蕭條として石に日のあたる柘榴かな　〃

草の戸をたたけばあくる蓮の花　〃

手にとるし位根を倒す蛍かな　千代

花七日菊なほ咲くや書き置の人も　蕪村

手折らんに人に考へや梅の花　千代

もの凄し春日の巫女の目に隠れ住む　〃

稲刈りて天下にこわいものなし　大江丸

以下全て

白　紙